

口語詩句 8 月総評 龍 秀美

＜総評＞戦後 80 年の夏。この欄もさまざまに表現されていました。価値観の片寄らない良さは口語詩句の自由なかたちによく表れており、最近はそれを強く感じます。

斎場

へ

影を蹴りつけ向かうとき

ちきゅうはひかりまみれの樹海

---

さいう 石川県

——若さの詩。死の影を「蹴りつける」ことで蘇る新たな生命のかたちは、生死の謎に満ちた「ひかりまみれの樹海」なのだ。

酔芙蓉晩年というイリュージョン

---

田崎森太 神奈川県

——朝から宵に向かって白から紅へと変化する酔芙蓉。名残の夢に激しく酔う姿と、あっという間に萎む命と。

溺れた無線機まだ発令のままの夏

---

大嶋 碧月 石川県

——日本人の心の海深く沈められた無線機はまだ成仏していないのだろう。

人権が嫌いな叔父の茄子おいし

---

詩央えみる 大阪府

——「人権」意識が高まるのは「進歩」だろうが、あらゆるものがハラスメントになってしまいそうな半面もある。頑固に自分の価値観を守る叔父の作る茄子の味は、さまざまなことを考えさせてくれる。

平和って

シュークリームとおんなじで

食べたらすぐに忘れてしまう

---

櫻川 佳子 愛媛県

——決まったかたちは無く、ふわふわゆるゆるとして取り止めもない。普段それがあることさえ忘れてしまいそうだ。形が無いからこそ遍在する。そういうものが本当の美味しいものなのだろう。平和もまた。

花器にさえ装飾がある

身体じゅう

至るところを飾りと思う

---

雲理そら 大阪府

——精神の器としての人体の美しさと花の美しさを際立たせる花器の存在と。若さの奢りの春。

出血のたびに小鳥がやって来る

---

桜庭 紀子 和歌山県

——「小鳥来る」は優しく温かな情景によく使われる季語だが「出血」に合わせることができるのは口語詩句ならではの自由さだろう。

火傷した声にそうめん押しあてる

---

千葉羅点 愛媛県

——危うい物言いに傷ついた状況が「そうめん押しあてる」というユーモアで救われる。冷たいそうめんの感覚もふさわしい。

微笑みのように短い放物線

戻るかたちを彼女は失くす

---

鈴木たなか 京都府

——顔面を一瞬横切る微笑みだが、その表情の変化は彼女自身にさえ理由が分からない。

乳飲み子の前髪ピンで留めて夏

---

木村 菜智 宮城県

——体温の高い乳児の髪の毛が汗ばんで張り付いている。リアルな夏の到来。

羊頭よ黙れ狗肉も負けんなや

---

平松 泥沸 兵庫県

——立場や評価は様々だがそれぞれが自分を出し切れればよい。価値観を押し付けないよろしさがユーモラスに詠われて楽しい。

祈ってもたったふた文字が難しい

セミのなく日に折ってみる鶴

---

波津 ゆみ 神奈川県

——「ふた文字」とは何だろう。「平和」か「反核」か、或いは「反戦」か。「祈」と「折」も重なる。

ちゃぶ台で

宿題してると

父の声

もうやめろ

めしの時間だ

---

京路 東京都 78 歳

——その昔は家の中でちゃぶ台という装置が食事、勉強、団らんなど多機能に働いていた。それらの機能に価値の優劣も無かった。ある意味究極の平等だったのではないか。

龍宮のウを窃取した猫を飼う

---

澤井 和水 東京都

——「窃取」は知られないようにそっと我が物にすることで窃盗とは違う。盗まれた意識が相手にあることで始めて「窃盗」が成立する。貴重な物を得た猫を飼うことで自分も密かにその一部を得たのだろう。最近の国際情勢をふと思う。

生活のまわりをきみが公転し  
あかるいけれどいつもさみしい

---

箭田儀一 広島県

——「明るい暮らし」という理想は何時の時代にもあり、それは地球を公転する月のように間違いない「きみ」の働きによる。あまりにも間違いない「きみ」に僕は必要とされているのだろうか。

鎮静のくすりを胸に塗るように  
水掻き少しひらいて眠る

---

まちのあき 宮城県

——いつもの自分から脱け出して「水掻き」のある生物になる。河童のイメージだろうが、人間と古来から親しい関係にある、人のようで人ではない生き物の存在が静かに鎮静へと導いてくれる。

原爆忌顔より先に手を洗ふ

---

船井 りん 東京都

——顔という知性や表層を示す部分より、手という身体の動きや情念を表す部分をまず尊重したのだ。大脳より小脳や脳幹かもしれない。